

## 吉野旅行―道長の金峯山詣でに関連して―

一文字 昭子

「道を通る」旅も今回で四回目となった。ただし、今回は「道を通る」というよりも、道長が通ったであろう道に思いを馳せる旅となった。

今春、臈谷寿先生より「藤原道長は大峰山に登った」という毎日新聞（大阪）の記事を頂いた（注1）。早速、今から数えて九九三年前の八月、藤原道長が辿ったとされる金峯山詣での道筋を調べることとなったが、それはなんと片道六時間以上はかかる「登山」と判明。すぐに幹事の間から「参加者が集まらないのでは？」「いや、私も遠慮したい」という声があがった。しかし、幸か不幸か大峰山は現在も「女人禁制」ということが判明し、一同は安堵のため息をついた次第である。

そのような事情なので、まさか福嶋先生と臈谷先生だけ登り、実況生中継して頂くというわけにもいかず、江戸時代の女人結界の碑がある、青根ヶ峯の麓まで行ってみることにした。それと、はずれにあるために普段は行かない西

行庵と苔の清水を見、最後に後醍醐天皇陵をまわることもなった。本文に入る前に、道長の金峯山詣でについて、簡単に記しておく。

### 藤原道長の金峯山詣で

『御堂関白記』寛弘四年（一〇〇七）八月二日条には

参金峯山、以丑時出立、

とあり、夜の二時頃出発し、羅城門を通過して、鴨河まで行く。そこから船に乗ったのは「辰時」つまり、明け方と書かれている。八幡宮（石清水八幡宮）に、「午時」（正午）に着き、この日は内記堂という所に宿泊した。以下、次のような行程である。

- 三日 大安寺に宿泊
- 四日 井外堂に宿泊。雨。
- 五日 軽寺に宿泊。終日雨。
- 六日 壺坂寺に宿泊。晴れ。
- 七日 観覚寺、現光寺へ立ち寄り、宿は野極。野極は吉野の蔵王堂の下である。この日は再び、雨であった。
- 八日 終日、雨のために野極にとどまる。

さて、次の九日条を見ると、

時々雨下、（宿寺）、祇園、寶塔晝為飯、兩寺皆修諷誦、奉御燈

（ ）は傍書の小字

となっている。■のところはよく見ると、うかんむりが書かれ、その上を墨で塗り消してある。そのため、通常は「宿」という字を補って読み下される。『御堂関白記』は道長の自筆本が現存しているが（注2）、具注曆にメモしてあるので、ところどころ読みにくい箇所がある。この「祇園」が現在のどこにあたるかで、道長が青根ヶ峯までしか登っていないのか、はたまた、山上ヶ岳まで登ったのか分かれ

るわけである。臈谷先生が送ってくださった新聞記事の副タイトルは「誤認された祇園の宿」となっており、記事を書いた銭谷武平氏によると、従来、この「祇園」は現在の「今祇園」とされていたが、これは「寺祇園」（今宿跡）のことであり、そうすると、行程に無理がなく、道長は確実に山上ヶ岳まで登っているのだという論旨になっている。

道長が青根ヶ峯までしか行っていないのか、山上ヶ岳まで登ったのかについての論争はその経緯を読むと結構おもしろい（注3）。興味のある方は注の論文等をどうぞ。なお、現在では山上ヶ岳まで登っているという説が優勢である。さて、この後、道長は

十日 御在所に到着。相変わらず「時々雨下」。

「御在所」が山上の本堂のことであると考えられている。

十一日。この日は大変忙しい。まず沐浴すると、三カ所の子守社に詣で、金銀・絹などを奉幣し、次に三十八カ所の社に参詣して、再び、奉幣。御在所へ詣でて、またまた絹やなにやらを奉幣。ここで、法華経をはじめ、主上（一条天皇）や中宮（彰子）、東宮（居貞親王、後の三条天皇）から託されたお経を納め、多くの僧に絹、袈裟などを配りまくる。つまり、さまざまなお願いを一気に祈ったわけ

である。『御堂関白記』のこの箇所の裏書に

件経等、寶前金銅燈楼、其下埋

とある。これが現在、国宝となっている道長の寛弘四年在銘の経筒のことである。この春、東京国立博物館でも展示されていたので、御覧になった方々も多いと思われる。当初、私はこの経筒が山上ヶ岳から発掘されたのなら、まず道長がそこまで登ったと考えるのが自然なのではないかと思っただけであるが、ことはそう単純ではなかった。経筒は江戸時代、元禄四年（一六九一）に、大峰山の山上本堂改修の際に発見されたといわれており、それ以来、金峯神社が所蔵している。つまり、江戸時代のことなので、出土の正確な位置が文書や図で伝わっているわけではなく、わからないのである。地元、洞川吉野の言い伝えでは「井筒丘」から出土したと言われており、口伝とはいえ、かなりの信憑性があるのではないかと考えられている。井筒丘は「湧出岡」の転訛と推察され、それは現在の山上本堂の事務所玄関のあたりと考えられている（注4）。なお「湧出岡」とは吉野の蔵王権現がここから出現したという伝説を持つ岩で、経筒を埋める場所としてはこれ以上の場所はない。さて、十一日の道長の行動へ話を戻すと、経筒等を埋めたあと、さらに、お祈りをし、奉納をし、僧たちに布施し、

そして自分のお経と妻、倫子の経を供え、霧が立ちこめる中、下山にかかった。夜になって「祇園」に宿をとった。翌、十二日は晴れで、宝塔に着いたと書かれている。この宝塔は今回、私たちも立ち寄った安禅寺跡にあったものといわれている。道長は行きに泊まった野極に立ち寄り、馬にのって川辺まで行く。

十三日、大野に着く。ここで、国司の接待を受ける。泉河まで行き、船に乗る。

十四日、暁に淀に着く。ここから車で鴨河まで行く。そして土御門に戻り、すぐに参内して、天皇と東宮に面会。それから退出。

以上、二週間にわたる行程での参拝であった。雨がちの天氣の中をかなり精力的に動いている。

この行程を忠実になぞる旅ができたなら、本当に感慨深いものがあつたことと思われるが、現在の私たちには時間的にいっても、到底無理な相談である。また、最初に述べたように山上ヶ岳は現在でも「五番関」からは女人禁制であり、その他の登山道でも、それぞれに女人結界が設けられている（注5）。山上本堂へいけないのであれば、わざわざ苦勞して登る意味はない。福嶋先生のお話によると、戦後、進駐軍（古い言葉！）が、この女人禁制というを撤廃

しようとしたことがあるらしいが、このときは村人たちが道に横たわって抵抗したそうである。

### 蔵王堂

さて、ここからは今回、実際に回った場所について述べる。私たちは山上での見学に時間を費やすために、バスで中千本バス操作場まで一気に登ってしまい、そこから歩いて蔵王堂へ行く。蔵王堂は吉野では説明の必要がないくらい、有名な場所であるが、ともかく、ここを素通りしては蔵王権現様にたいして失礼というものである。お堂のお坊さんの説明によると、蔵王堂を造っている柱の巨木はそれぞれがすべて、一本の木だそうである。杉などはまあ、想像がつくが、躑躅の巨大な柱には驚かされた。躑躅なんでものはせいぜい庭や公園の低木というイメージしかない。後ろには山梨の巨木の柱もあり、それも、世界に例をみない貴重なものだそうである。紅葉の前で人の少ないこともあってか、お坊さんは前半にお堂の説明を、後半に蔵王権現の説明をしてくださるつもりであったようだが、蔵王権現のお話のちようど手前で時間切れとなってしまう、それは各自でパンフレットを読むことにして、失礼することになった。外へ出ると風が強くなってきており、お堂の

前の香炉の蓋がとばされてしまうほどである。来た道を勝手神社まで戻り、その前にある西澤屋というお食事処に必要な荷物を置かせていただく。天王橋からマイクロボスで金峯神社を目指す。今回の旅行は三〇名弱であったが、マイクロボスはそれでほぼ満杯の状態である。

### 金峯神社・西行庵・苔の清水

山上でバスを降りたところに修行門と書かれた石の門柱がたっている。鐘の鳥居の妙覚門、その他、発心門、等覚門と併せて四つの門が修験道の行場とのこと。その修行門から急な坂を登っていく。途中、切れ目なく虫の音が響いている。ハルゼミの声だそうである。どんな声かは「なんか冷蔵庫の音みたい」という幹事の一人の感想を記しておくので想像して頂きたい。

登り切ったところに金峯神社がある。想像していたよりもずっと小さなお社である。山の上にあるのと、下から見上げるようにしても拝殿しかみることができず、何となく敷居の高いお社に思われる。

ここを道長が参拝したのは先にも記した通り、八月九日から十一日にかけてであるが、期せずして今日は九月十五日、旧暦でいうと約一ヶ月ずれるのでちようど時期的には一致

する。そして天候も雨がちで同じである。この天気の中を山上ヶ岳へ行くにはそれなりの覚悟が必要かと思われる。金峯神社の下に義経の隠れ塔といわれる小塔があるので、ついでに見学する。ただし、この塔はトタンの板に囲まれ、近づけないので、坂道の途中から見るだけに留めた。吉野で義経は静御前だけは助けようと、金銀を渡して頼むが、吉野の衆徒は金銀だけ取って、静御前を鎌倉方へ引き渡したという。参加者は大方、平安時代に興味がある人々で構成されているので、このあたりの話は「いつの時代も同じようなものだな」位の感想で終わってしまう。

金峯神社の前から右へ行くと、西行庵である。細い山道を降りていくのであるが、途中にさらに細い道が分かれており、入り口に「ここからは奥へは入れません」と板が置いてある。書くまでもないことのように思われたが、このような札の奥にはまま、松茸が生えているという福嶋先生の解説に納得した。そうなると、ますますこの板はやぶ蛇のように思われる。十分弱ほどで下りきり、少し開けた場所に出た。奥まったところに小さな庵がある。これが有名な西行庵である。ただし、本当に西行が住んだ場所というわけではなく、後の人が仮託したものとのこと。庵の中に西行の像が安置されている。仮託といってもいかにも西行にふさわしい雰囲気である。

花をみしむかしの心あらためて  
よしのの里にすまんとぞ思ふ

『山家集』

ここは芭蕉も訪れており、『野ざらし紀行』には

西上人の草のいをりのあとは、奥の院より右の方二町ばかりわけ入程、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。

とあり、更に本居宣長も『菅笠日記』に

木の下 道を、二丁ばかり下りたる谷陰に、苔清水とて、岩間より水の滴り落る所あり。西行法師が歌とて、学び言ふを聞くに、さらにかの法師が口付にあらず。無下に卑しき似非歌也。なほ一町ばかり分て、かの住めりし跡といふは、すこし平らなる所にて、一丈ばかりなる、仮初めの庵、今もあり。桜もこゝかしこに見ゆ。

花見つゝ住みし昔の跡訪へば苔の清水に浮かぶ面影と記している。特にどうという場所ではないが、伝説がそれぞれ時代に人を呼び、それが、史実として伝わっていく。そうなると、何でもなかった場所に意味が付けられて

建物がつくられ、また人を呼ぶ。不思議な現象である。

さて、降りてきた道の左手に小径が続いており、そこを辿って苔の清水へと向かう。宣長とはちょうど逆の道である。雨がいつの間にかやんでいる。道の脇には赤い水引が咲いており、のどかな風情を醸し出している。福嶋先生がお気に入りの与謝野晶子の歌を教えて下さった。

まだ二十歳、町娘にてありし日の、  
面影つたふみずひきの花

ただし、福嶋先生のコメントによると、二十歳の町娘時代の自分を水引のような清楚な花にたとえるのはちよつと厚かましいとのこと。ごもつともである。そんな話をしていくうちに苔の清水に到着した。いつもはもつと少ないという水量が雨のためか豊富である。石碑が立っており、『西行物語』の

とくとくと落つる岩間の苔清水  
くみほすほどもなき住居かな

という一句が記されている。これが、宣長がいう「無下に卑しき似非歌」であろうか。この清水はどうやら飲めるらしい。

そこから、さらに奥の小径へとすすみ、道長が宿泊したと思われる宝塔跡へと向かう。途中、開けた場所があり、人工的な盛り土が目につく。こちら辺は寺の坊があらちちらに立っていたと推定されており、盛り土もその建物の跡であろうとのこと。隠棲するなら、先ほどの西行庵よりこちらの方が心地よさそうである。

十分程で宝塔院跡に到着した。説明板によるとこのあたりに宝塔院があったといわれているが、その正確な場所は定かではない。明治の廃仏毀釈（注6）の嵐に見舞われるまではこの一帯に多宝塔、四方面堂、安禅寺蔵王堂などの大小の寺院が点在しており、西行庵に至るまでの平坦な場所はその跡であると書かれている。最初に立ち寄った蔵王堂に客仏として安置されている木造の蔵王権現立像（重要文化財）も、元はこの安禅寺蔵王堂の本尊だったとのこと。見てきたはずだが、覚えていないのは不覚であった。それにしても廃仏毀釈というのはすさまじい嵐であったと思われる。

ここから、江戸時代の女人結界の碑まではあと少しなので、全員で向かうこととする。十分とかからないとのことだったが、あちらこちらに木が倒れており、なかなかの難所である。どけることができないう大きな木は梯子のようなものが立てかけられてそれを伝って乗り越えていく。室生寺の塔を破壊した先の台風の爪痕だそうである。

女人結界の碑のうしろにはお地藏様がたっており、なんと金糸がぬいこまれた赤い派手な大きな帽子をかぶっていた。それも一興と思つたが、写真撮影のために一時的に脱がせる。登山の装備をした男の人が通りかかったので、道をあける。ここから山上ヶ岳までは約六時間、かなり早いペースでしばらくすると見えなくなつてしまった。曇天なので無事を祈る。反対側の脇の小径を五分程上にあがると青根ヶ峰だそうであるが、現在では木が生い茂つていて何も見えないというので、特に登らず、金峯神社まで戻つた。

### 水分神社・世尊寺跡

行きはマイクロバスで町道88号線を登ってきたが、帰りは反対側にある道を水分神社などを回って歩いて下ることになった。坂はかなり急なところもあり、雨で道が濡れているので神経を使う。道ばたで福嶋先生が緑がかった金属的な光沢の黄金虫を見つけると、玉虫のようにきれいな昆虫である。先生の説明によると、センチコガネといい、動物の糞をころがして餌とするいわゆる糞ころがしのこと。「センチ」とはようするに「糞」を意味するらしい。そうはいってもとても美しく、ブローチにでもしたい程で

ある。記念にデジタルカメラで撮影。関西ではごくふつうに見かける虫とのことである。

水分神社に到着したときに、小雨が降ってきた。水分神社の神殿は桃山時代のもので雨を通して見ると、負け惜しみでなく、一層、神秘的さが増すように思われる。しばし、回廊に腰を下ろして休む。しだれ桜や石楠花が植えられていた。本居宣長は両親がここに祈願して授かった子であったので、後にお礼参りにきている。その時の紀行文が『菅笠日記』(注7)である。

又「みくまり」を横訛りて、中比には、「御子守の神」と申し、今はたゞに「子守」と申て、子孫の榮えを祈る神と成給へり。然て我父も、こゝには祈り給ひし也けり。

雨がおさまるまで休憩することになり、福嶋先生と臈谷先生の、彰子が入内してから皇子を生むまで、約十年(注8)、道長がいかにじりじりと待ったであろうかというお話から、源氏物語の女三宮が子供を生むまで、やはり七年くらいかかっている(注9)などというお話を聞く。ついでに道長が山上ヶ岳へ参拝したときはすでに糖尿病であったこと、また山中裕先生の説によると日記にあれだけ天気のことを書くをいうのは気管支喘息だったからではな

いかなどという話に及ぶ。政権をまだ完全には掌握していない道長が、病をおしてなお、祈願しようとした蔵王権現への信仰の強さには圧倒される思いである。そのかいあつてか、道長が待ち望んだ皇子誕生は実に、翌寛弘五年(一〇〇八)であった。

雨はおさまるどころが、激しくなってくる。水分神社の回廊を使って、細殿や一枚格子、『枕草子』で清少納言が碁盤の上にあがつて格子をあげることなど、実地説明も入るが、お腹も減ってきたので、ぼちぼち出発することにした。

坂を下りながらも福嶋先生の源氏物語のお話は尽きず、源氏物語「賢木」巻の藤壺と光源氏が逢う場面に福嶋先生のお話が及ぶ。教室などのかしこまった講義ではまず聞くことのできないであろう、ざつとばらん口調なので、思わず引き込まれてしまう。この後、

御衣ども隠し持たる人の心地どもいとむつかし

という場面を読むたびにこの時の解説を思い出さずにはいられない(注10)。この話を文にして残せないのが残念であるが、どうぞ、「賢木」を読み直して、想像して頂きたい。

そうこうするうちに世尊寺跡に到着した。下り坂の途中

で左に曲がったところにあるのだが、福嶋先生の源氏物語講釈がいよいよなめらかなになり、今度は桐壺帝が、なくなった桐壺の更衣の里から帰ってくる王命婦を待つ場面に移り、私たちも聞き惚れてしまつて、周囲の状況などどこへやら。それがとんでもない失敗に結びつく。気がつくくと、後藤祥子先生、臈谷寿先生、それに幹事の大口が一行の中にいないのである。あわてて探しに走つたが、どこにも見あたらない。おそらく、世尊寺跡を見るために左へ曲がった時、遅れてきていた先生たちはそうと知らずに下に降りてしまったのではということになった。昼食を西澤屋でとることになつていたので、最悪、そこで落ち合うことができない。臈谷先生は吉野に詳しいし、大口は普段はともかく、緊急の際にはとてもたよりになるので後藤先生の身に危険はないであろうとの結論に達し、まずは世尊寺の鐘を見ることにした。冷静な判断か、薄情な弟子かは結果如何にかかっている。

この世尊寺は吉野寺とも言われ、古い寺であることは確かなのだが、創建等の詳細は不明である。明治七年(一八七四)に廃寺となった。その後焼失して、現在は鐘樓を残すのみである。余談であるが、書道の世尊寺流のもととなった藤原行成の創建による世尊寺は京都にあったもので全く関係はない。また現在、吉野川北岸に、世尊寺という寺があるが、

その寺との関係も不明である。この北岸の世尊寺はもとは比曾寺といい、これも由緒ある寺である。

さて、我々が行った世尊寺跡の鐘楼は、今では展望台となつてゐる広場から、さらに蜘蛛の巣だらけの小径をあがつた木立の中にひっそりと下がつてゐる。鐘の上部のほうには年号と思われるものが書かれてゐるのが見えた。「承暦」のようだが、定かではなかつたので、後で調べたところ、年号は「永暦」で平忠盛が保延六年（一一四〇）に寄進したものであつた。名鐘といわれている（注11）。

鐘を見終わつて、あとは一路、昼食の用意されてゐる西澤屋へ急ぐ。途中、携帯電話で西澤屋へ三人ほど、先に到着するかもしれないことと予定より大幅に遅れているが、これから急いでそちらに向かう旨を連絡する。

西澤屋へ着くと、幸いなことに後藤先生一行が先に到着しており、先を歩いていたはずの私たちが遅いのを不思議がっておられた。世尊寺の件をお詫びし、無事に合流できたことを感謝する。すでに午後二時をまわつてゐた。

### 如意輪寺・後醍醐天皇陵

最後の行程である、如意輪寺へバスで向かう。地図で見ると、バスに乗らなくてもと思われる距離であるが、谷を

挟んでゐるので、徒歩で向かうととんでもないことになつてしまふ。雨も断続的に降つてゐる。如意輪寺は現在では吉野の谷陰にひっそりとたたずむ小さなお寺であるが、その昔は吉野朝の勅願寺という格式の高い寺であつた。横に石段があり、後醍醐天皇陵へと続いている。この御陵は又の名を塔尾陵といい、歴代天皇陵の中では唯一、正面が北向きになつてゐる。『太平記』巻二十一の「先帝崩御事」によると、後醍醐天皇は

玉骨ハ縦南山ノ苔ニ埋ルトモ、魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ

との論旨を残し、左手に法華経を、右手に剣を持つて崩御したという。そうした説明を聞きながら、御陵のまえにたたくと、後醍醐天皇の魂魄が今もあたりにとどまつて、周りの木立の静寂さを支配してゐるかのような気がしてくる。自然、声もひそひそ声になる。御陵の中央には盛り土が見え、これは他の御陵にはみられない独特なものだそうである。なお、この御陵の途中には南朝の長慶天皇の皇子の墓もある。最後に「ついで」のつもりで立ち寄つたのであるが、足を運んだだけのことはあつたように思われた

### 結び

以上が今回の旅である。今までの旅のように一つのテーマを持って道を通るといふものでなく、やや勝手が違つたので、とまどつた方もあつたかと思う。いつもながら、

福嶋先生のご説明と臈谷先生のコメントだけでもつたような旅であつた。両先生には深く感謝すると共に、今まで、私たちの拙い企画旅行に参加して下さつた方々全員に御礼申し上げたい。また、バスを運行して下さいました木村五郎氏の運転の絶妙さも、旅の心地よい思い出となつてゐる。ひとまず、今年でこれまでの一連の旅行に幕を閉じたいと思ふ。

(注1) 平成十一年（一九九九）十一月二十六日（金）

夕刊

(注2) 陽明文庫蔵。思文閣出版から複製本が出ている。

(注3) 三宅敏之「金峯山経塚の諸問題」

（「山岳修験」第一六号・一九九五年十月）

濱田隆「藤原道長の御岳詣」

（仏教芸術一六八・昭和六十一年九月）

佐藤虎雄「撰関時代の御嶽詣」

『撰関時代史の研究』昭和四十年・

吉川弘文館

森下恵介「吉野と大峰山」

（『季刊考古学』第六十三号・一九九八年五月）

『金峯山経塚遺物の研究』

（昭和五十四年・帝室博物館編・東京堂出版）

(注5) 山上ヶ岳へ至る道は三本ある。残りの結界は

小稲村ヶ岳と阿弥陀が森である。

(注6) 明治元年（一八六八）三月の神祇官の再興およ

び太政官布告による神仏判然令により、神官・平田派国学者らを中心に神仏分離、神社における仏堂・仏像・仏具などの破壊や除去が行われた。これに対して廃仏反対の民衆の動きも高まり、明治八年（一九七五）に信教自由の保護が各宗に通達された。

(注7) 新日本古典文学大系『近世歌文集』所収

（岩波書店）

(注8) 彰子の入内は長保元年（九九九）、後一条天皇

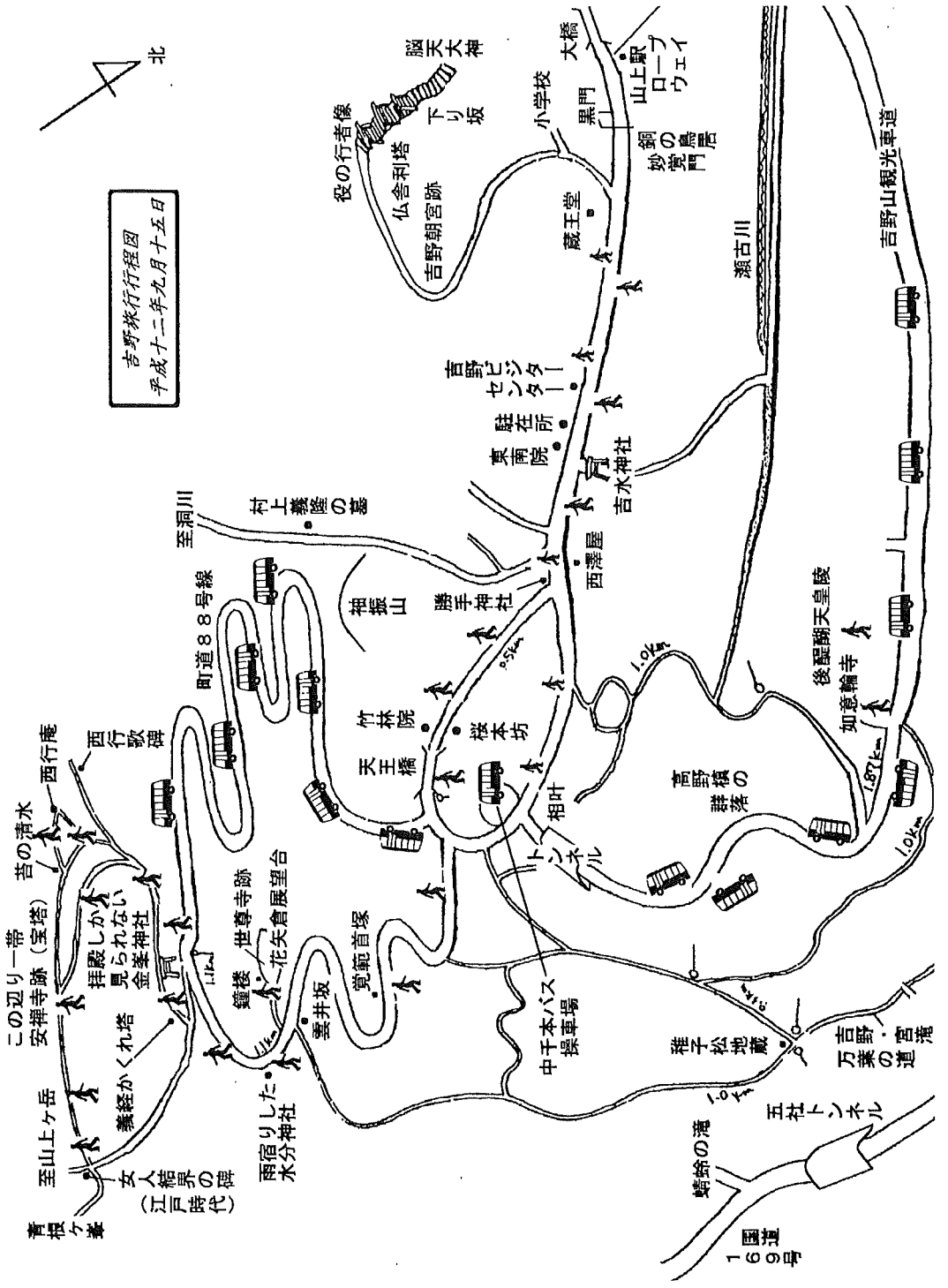
の誕生は寛弘五年（一〇〇八）である。

(注9) 女三宮が六条院に興入したのは源氏四十歳の

年。女三宮の懐妊は源氏四十七歳の年である。

(注10) 小学館全集『源氏物語』2・一〇八頁

(注11) 永暦年間（一一六〇）六一



吉野旅行行程図  
平成十二年九月十五日

